

# 中年期女性における社会人学生生活の意味について

高橋美枝

## The Meaning of Mature Student Life for Middle-aged Women

TAKAHASHI Mie

キーワード：中年期、社会人学生、入学動機

### はじめに

今日、生涯学習時代となり、各大学等では社会人学生の受け入れを行っている。この社会人学生について、調査研究や事例研究が行われている。

矢口悦子（2004）<sup>(1)</sup> は大阪女子大学の社会人特別選抜によって大学あるいは大学院に入学した社会人学生経験者にインタビューを行い、女性のキャリア形成の類型として、目的に向けて学習の継続によるキャリア作りを行う継続型と、子育て期からの再出発（再出発型）の2つの類型があるとしている。

また、看護師や介護福祉士の養成課程で学ぶ社会人学生を対象とした、次のような研究がある。

三木隆子（2013）<sup>(2)</sup> は3年課程の看護専修学校の社会人経験を持つ3年生を対象に、看護学実習用の学習活動自己評価尺度、社会的スキル尺度、自己教育力測定尺度を実施し、学生の属性と尺度の測定結果との関係を調べている。社会的スキルは、大学卒業学生の方が高等学校卒業の学生よりも高く、自己教育力については30歳以上の学生の方が20歳代の学生よりも、大学卒業学生の方が高等学校卒業の学生よりも高いという結果が得られている。また、社会的スキルと自己教育力は、共に看護学実習における学習活動との間にかなり高い相関がみられた。

草薙眞由美ら（2011）<sup>(3)</sup> は学生に対する質問

紙調査及び教員に対する半構造化面接を実施し、社会人学生に対する介護福祉教育について検討している。結果から、社会人学生は学習に対する意識が高く積極性があり、教員は決められた時間内に必要な知識・技術を教授する責務があるため、学生の積極性を適切にコントロールする必要がある。また、社会人学生は現役学生に与える影響が大きい。さらに、教員は教授方法を工夫していると考察している。

また、河内康文（2012）<sup>(4)</sup> は介護や福祉の分野において、今後雇用が増加し多数の社会人学生が入学してくる状況のなか、社会人に対する教育論の構築の必要性を論じている。

稲垣恵つ子（2008）<sup>(5)</sup> は大阪女子大学及び大学院に入学した社会人学生経験者へのインタビューから、「キャリア志向型」、「自分探し型」、「学歴取得型」、「キャリアアップ型」の4類型を導き出している。稲垣恵つ子（2009）<sup>(6)</sup> では『大阪女子大学生涯学習研究資料集 1997』の「社会人学生体験事例集」を分析対象として、大学入学の要因、大学入学への経緯を検討している。

富樫和代ら（2011）<sup>(7)</sup> は看護学校の実習施設における実習指導者への質問紙調査を行った。社会人学生に対するイメージは多い順に、目的意識・動機が明確、学習意欲が高い、自己概念・価値観が確立、社会経験豊富というものであった。さらに、社会人学生に対する実習指導で良かった点として、コミュニケーションが上手、リーダーシップがとれる、細かく気づく、積極的な態度、

態度がしっかりしている・優れている、指導を素直に聞き入れる、学習が良くできている、温かい看護・積極的ケアという内容であった。一方で気になった点、困った点として、指導を素直に受け入れられない、看護目線で捉えられない、おとなしい、反応が鈍い、他学生が頼り切る、とにかく終了すれば良いという態度、単独判断し勝手な行動、他学生との交流が少ないがあげられている。

先行研究では、主に介護福祉や看護の領域における社会人の学修について検討されている。生涯学習時代のなかで、大学での学習成果がどのようにライフデザイン、キャリア形成に位置づけられ生かされていくのか、そのための社会人に対する教育の留意点を検討することは意義があると考えられる。保育、幼児教育においても、研究を進めていく必要がある。

## 目的

保育士、幼稚園教諭の養成を行う短期大学における、中年期の社会人学生における短期大学生活の意味を検討することを、本研究の目的とする。

## 方法

### 1. 調査対象

A県B市に位置するC短期大学の幼児保育学科を平成24年～平成27年に卒業した社会人学生を対象とした。そのうち、40歳～50代前半の女性に調査を実施した。ここで女性と性別を限定したのは、「ライフサイクルの折々の時期に、例えば結婚、出産・育児や、老親介護といったライフイベントを通じて」(園田雅代, 2007)<sup>(8)</sup> 自己検討がなされる際に、その在り方には性差の影響が考えられ、被調査者の確保が可能である女性を取り上げて調査を行うこととした。被調査者の調査時の年齢は以下のとおりである。

40歳	1名
42歳	1名
43歳	1名

44歳	1名
45歳	1名
46歳	2名
48歳	1名
54歳	1名

合計 9名

### 2. 調査方法

調査は質問紙の郵送法により実施した。短期大学卒業後、6ヶ月～9ヶ月後に研究の主旨を記した文書と共に、質問紙を郵送した。2名の卒業生は返信がなかったため、調査対象としなかった。被調査者には質問紙と共に、研究協力及び論文発表についての同意書への記入を依頼し承諾を得た。

### 3. 調査内容と分析方法

質問紙の内容は、プロフィール(年齢、入学前の最終学歴、入学前の職業、入学前に持っていた資格、現在の職業、在学時の未婚・既婚の別)をまず尋ね、その後

- ①短期大学への入学のきっかけになったこと、いきさつはどのようなことでしたか。
- ②保育士資格がとれる学科を選んだ理由は、どのようなことですか。
- ③入学時、どのような目的、目標をいだいていましたか。
- ④短期大学の2年間の中で、有意義だと感じたことにはどのようなことがありましたか。具体的にお答えください。
- ⑤短期大学の2年間の中で、苦しかったことにはどのようなことがありましたか。
- ⑥⑤の苦しかったことは、どのように乗り越えましたか。
- ⑦卒業後の進路は、どのように決めましたか。
- ⑧卒業後、半年以上経過した今、短期大学の2年間を振り返ってどのように思いますか。
- ⑨その他

の9項目について質問した。

被調査者の回答には「前の質問で書いたように」や「ここで回答することはないかもしれませ

んが」などと言った記述がみられた。このように、質問に回答している中で体験やその時の感情を思い出して答えている様子がみられた。そこで、質問項目ごとに分けて分析を行うのではなく、回答内容全体を分析することとした。また、被調査者のプライバシーを守ることへの配慮から、全被調査者のすべての回答内容を、一文が一意味内容になるように短文に分け、一文で1枚のカードを作成した。KJ法（川喜多，1967）<sup>(9)</sup>を参考にカテゴリー分類を行った。テーマごとに関係のあるカードを全体のなかから抽出し、そのカードについて類似性に着目してカテゴリー分類を行った。カードは繰り返し使用した。

## 結果

すべての回答内容を一文で一意味内容になる短文に分けカードに記したところ、全体で156枚のカードが得られた。全体のカードから本研究では「入学のきっかけ・動機」、「短期大学生活で有意義と感じたこと」、「短期大学生活で苦しかったこと」、「短期大学生活で苦しかったことをどのように乗り越えたか」のそれぞれの内容に関連したカードを抽出した。

### 1. 入学のきっかけ・動機

「入学のきっかけ・動機」に関するカードは60枚抽出された。この60枚のカードは7種類のカテゴリーに分類することができた。以下、“ ”内にカテゴリー名を、カテゴリー名の後ろの（ ）内にカードの枚数を記すこととする。

もっとも多かったのは“資格の取得”（13）で、「保育士の資格が取りたかった」、「初心者で就職するには資格をとる必要があると思った」、「短期大学であれば、保育士資格以外の資格も取得できるといった」などの回答内容であった。

次に、“以前からの夢の実現”（11）が続く。「幼い頃に保育士になりたかった」、「娘が幼稚園に入園して、幼稚園の先生になりたいと憧れるようになった」、「もともとやりたい仕事だった」

と、いろいろな事情から中断していた夢を叶えたいという内容の回答であった。

さらに、“正規職員としての就労、就職難で求人が多い領域”（10）が多かった。「就職難の中、保育士の求人は多く正規雇用のチャンスがある」、「専業主婦から正規雇用を目指すのは困難だが、二年間がんばって保育士の資格を取ることで道が開ける」、「自宅から近い保育所で働きたい」などの内容であった。

また、“生活状況の変化”（8）では「子どもが小学生になった」、「中学生になった」、「自分自身の子どもが成人した」などの子どもの成長に伴って資格取得や就労を考えたという回答がみられた。東日本大震災の際の子どもを迎えに行けないという体験をきっかけにして「歩いて迎えに行ける勤務先」の希望から保育所への就労を目指すという経緯の回答もみられた。「離婚」をきっかけと回答している被調査者もいた。

子育て経験のある方からは、“子育て支援や社会貢献”（7）と「自らの子育ての体験を子育て支援に生かしていきたい」、「親の気持ちに寄り添いたい」という回答がみられた。また、それまでの社会経験の中で発達における「グレーゾーンの子どもたち」との出会いから「専門的な助言など何かできることはないか」と考えたことが入学への動機であるとの回答もあった。

“学修への動機”（4）と“学費免除、委託訓練生制度の利用”（4）は同数であった。“学修への動機”は「相談支援を学びたかった」、「保育を学びたい」、「保育士として必要な知識・技術を学びたい」という内容であり、「授業はできるだけ真剣に取り組めるように心掛けていた」と学修への意欲の高さがうかがえた。“学費免除、委託訓練生制度の利用”は被調査者が所属していたC短期大学では、埼玉県の「委託職業訓練制度」による入学生を受け入れており、この制度を活用することによって入学した被調査者が「ハローワークでこの制度の説明を受けて入学した」と回答したものである。

その他の3つの回答はカテゴリー分類ができな

かった。

## 2. 短期大学生生活で有意義と感じたこと

「短期大学生生活で有意義と感じたこと」に関するカードは39枚抽出された。カードからは5種類のカテゴリーが得られた。

最も多かったのは“人間関係”(18)であった。さらにこの“人間関係”のカテゴリーは、“友人・クラス”(13)、“教員”(4)、“一般”(1)の3つの小カテゴリーから構成されていた。“友人・クラス”に含まれる内容としては、「クラスがあったことにより、年齢・性別、タイプが自分とはまったく異なる人と関わることができた」、「他の職業と比べても、人との関わりが重要であるので、苦手なタイプや考えの異なる人と接することができたことが、一番有意義であった」、「10代～40代までと、クラスの年齢差があったことが、お互いにとってプラスであった」、「利害が無く(職場の友でも、ママ友でもない)、純粋な友人関係が出来上がり、学校へ一歩向かうと主婦でも母でもない、私個人としての時間が始まりました」、「少人数なので、交友関係も良く築け、毎日通学するのが楽しかった」などであった。“教員”との関係についての記述もあり、「少人数の学校であったので、先生方とも本音で話げできた」、「科目によるが、とても質の高い先生方と出会えた」、「いろいろなことを教えてくださった先生方に感謝している」、「学生との距離が近かったので、授業を受けるのも楽しみだった」などであった。「勉強と同じくらい、人との関わり大切さを学んだ」と人間関係の形成の意味を捉えた回答もみられた。

次に多かったのは“学修・授業”(8)であった。「保育の学び」、「心理の勉強」、「一年生の時に、キャンプインストラクターをめざし参加」した「野外活動演習」のキャンプ体験など、具体的な授業科目や分野をあげた回答や、「毎日学ぶことが楽しく感じた」、「何か目標を持ち、それに向かって勉強するのは、とても楽しくやりがいがある」、「新しいことを学べたことは、人生の糧にな

った」と学修体験自体の意義についての記述もみられた。

さらに、“時間”(4)についての記述がみられた。「この年になって、2年間自由に時間を使い勉強ができた」、それまで「流れていた時間の流れ方が少し変わり、ときに大変だったが時間の使い方等も併せて、生活そのものが有意義だったのだと今は感じている」などと、学生としての時間の流れを体験することが、「これからの人生設計をしていくのに貴重なとき」であると感じていた。

“実習体験”(2)では、「机の上では学べない、実際に子ども達に関わることができて楽しかった」、「先生方の仕事を見て学ぶことも多かった」などと意義を振り返っていた。

“その他”(7)に「もう一度学生生活ができるということはとても私自身には有意義だと感じた」、「保育士資格をとることができた」、「社会人になってからの学校なので、より学べることや学生生活が貴重なことと感じた」、「久々の学生生活も楽しめました」、「さまざまな方との出会いや学び」と学生生活全体に意義を見出していた。

## 3. 短期大学生生活で苦しかったこととそれをどのように乗り越えたか

「短期大学生生活で苦しかったこと」に関するカードは10枚抽出された。「実習日誌」の作成などの“実習”(3)、“授業や学修”(3)と短期大学での学びに関する内容が多くみられた。“授業や学修”では、授業の質に科目により「ばらつきがある」や、「授業自体に関する疑問」、「課題レポートの大変さ」があげられていた。また、関連して“家庭と勉学の両立”(2)に関するものがあり、さらに環境の異なる「クラスメイトとうまくやっていけるか」という戸惑いや「進路について」理解が得られない教員との体験の記述がみられた。

“短期大学生生活で苦しかったことを、どのように乗り越えたか”に関するカードは13枚抽出された。最も多かったのは、“友人・クラスメイト”

(5) であり、クラスメイトと励まし合って乗り越えたことが窺えた。次が“教員”(4)で教員に「相談」することで「支えられた」と感じていた。両親や子どもの“家族”(2)と「がんばるしかない」という“決意”(2)の回答がみられた。

## 考察

本研究では全カードから「入学のきっかけ」、「短期大学生活で有意義と感じたこと」、「短期大学生活で苦しかったこと」、「短期大学生活で苦しかったことを、どのように乗り越えたか」のそれぞれの内容に関連したカードを抽出している。それぞれのカードの回数には違いがあり、「入学のきっかけ・動機」が60枚と群を抜いて多く、次に「短期大学生活で有意義と感じたこと」の39枚であり、「短期大学生活で苦しかったこと」は10枚、「短期大学生活で苦しかったことを、どのように乗り越えたか」は13枚であった。調査内容として、プロフィールの他に9つの質問項目を設定しているうちの3つが「入学のきっかけ・動機」に結びつきやすい内容であったことを考慮しても、「入学のきっかけ・動機」の回答内容が多く充実しているといえる。社会人としての生活や、専業主婦として家事や子育てに専念して中年期を迎えた女性にとって、学生としての2年間を送ろうと決意すること自体が、大きな節目となる出来事であることが反映されている。

「入学のきっかけ・動機」では、保育士の資格を取りたいという動機があげられていた。資格を取得することで、以前から抱いていた夢や正規雇用としての就労が実現すると考えられていた。中年期では生活状況の上でも、子育てが一段落するなど変化を迎えることが多く、その際に就労の充実や以前から抱いていた夢の実現をめざすことが考えられる。“資格の取得”、“以前からの夢の実現”、“正規職員としての就労・就職難で求人が多い領域”、“生活状況の変化”は相互に結びついて動機を形成していると考えられる。また、それま

での人生体験に基づいて、“学修への動機”についても高い期待を抱いている社会人入学生もおり、その期待に応える授業を有意義と感じ、期待に十分にできていないと感じた場合には、授業が苦しい体験に結びつくということが考えられる。

「短期大学生活で有意義と感じたこと」の回答のうち、約半数が“人間関係”であったことは興味深い。職場や子どもを通じた人間関係とは異なる関係を「利害がない」、「純粋な」友人関係と感じている被調査者もいた。異年齢の学生との交流を、人との関わりが必要な保育者としての仕事と結びつけて、その体験を有意義と考えている被調査者もみられた。また、教員とのかかわりや授業などを通じた学修からも、充実感を抱いていることが窺われた。短期大学での生活は、それまでの生活とも卒業後の生活とも異なる時間であり、その時間そのものが有意義なものであると感じている回答もあった。

有意義と感じる中でも、実習は緊張を伴い、実習日誌の作成など、これまでの体験と異なることに取り組むことでは苦しさも感じていた。また、授業の課題への取り組みが負担になる場合もあった。さらに、短期大学入学時の期待に対して、授業の質に「ばらつき」を感じ、それが不満につながっている場合も考えられる。高校卒業して入学している学生と、すでに大学等を卒業している学生を含む社会人学生を同じ授業の中で指導していく難しさはあるが、社会人学生特有の意識、悩みを理解しての支援が必要となる。

それらの苦しかったことを乗り越える中でも、人間関係が大きかったことがわかる。友人や教員の存在が支えとなっていた。

このように、中年期の女性が社会人学生として短期大学の学生生活を送ることは、これまでの人間関係や時間と異なる体験を過ごすことである。資格の取得には苦しいことも体験するが、それを支えてくれる友人関係や教員との関係を体験したり、自分自身の決意を確認することは、保育者としての仕事を行っていく上で支援の意味やあり方を考えていくことともつながっていくと考えられ

る。

## 今後の課題

本論文の調査は社会人入学で学生生活を行った中年期の学生を対象に、卒業後6ヶ月～9ヶ月に実施した。これらの卒業生にとって、その後この学生生活がどのような体験として根付いていくのか、継続的に追っていくことができると興味深いと考える。また、若い学生との関係を有意義と感じている中年期の社会人学生が多かったことから、他の学生はどのように感じていて、どのような相互作用が生じていたのかについて明らかにしていきたい。

最後に、多忙なか、調査にご協力いただいた皆さんに感謝したい。ありがとうございました。

学、2008年、pp.35-52.

- (6) 稲垣恵つ子 「社会人学生のキャリア形成過程－社会人学生体験事例集から－」『奈良女子大学社会学論集』 第16巻、奈良女子大学、2009年、pp.95-110.
- (7) 富樫和代・今治涼子・百々晃代・東谷みゆき・大柳薫 「実習指導者の社会人学生へのイメージと指導をとおしての思い」『中国四国地区国立病院附属看護学校紀要』 第7巻、2011年、pp.98-104.
- (8) 園田雅代 「「女性」に主眼を置く理由」、園田雅代・平木典子・下山晴彦編『女性の発達臨床心理学』 金剛出版、2007年9月、p.9.
- (9) 川喜多二郎 『発想法』 中公新書、1967年、pp.45-114.

高橋美枝 (埼玉東萌短期大学幼児保育学科)

## 文献

- (1) 矢口悦子 「生涯学習体験と女性のキャリア形成」『女性のキャリア形成支援に関する調査報告書』 国立女性教育会館、2004年、pp.9-16.
- (2) 三木隆子 「社会人学生の看護学実習における学習活動－社会的スキル・自己教育力との関係－」『インターナショナル nursing care research』 第12巻1号、2013年、pp.105-114.
- (3) 草薙真由美・岡崎昌枝・黒木ひとみ 「社会人学生に対する介護福祉教育に関する研究」『香川短期大学紀要』 第39巻、香川短期大学、2011年、pp.81-87.
- (4) 河内康文 「社会人学生に対する介護福祉士養成教育における概念整理と課題」『今治明德短期大学研究紀要』 第35巻、今治明德短期大学、2012年、pp.1-10.
- (5) 稲垣恵つ子 「女性のキャリア形成と生涯学習－社会人学生の経験を通して－」『奈良女子大学社会学論集』 第15巻、奈良女子大